

# 「アイヌ民族の里」で進む 二風谷ダム建設

## 滝川康治

民族の歴史と遺跡の運命

北海道の背骨にあたる日高の山なみから水を集めて太平洋に注ぐ沙流川は、古いアイヌ語でシシリムカ（水の湧く川・塞がる川の意）と呼ばれた。沙流川筋は、アイヌ民族の人口密度が道内で最も高い地域である。

初秋のある日、上流側からクルマを走らせた。この夏の大雨で生じた地滑りの爪跡があちこちに見える。上流にある岩知志ダムは、堆砂で埋まった上に流木が押し寄せ、無残な姿をさらす。山々が両側にそびえ、川の流

れとともに麓の平地が次第に広がりを増していく。人口七千人あまりの平取町の中ほどに位置する二風谷地区は、中心部にアイヌ文化博物館や民芸品店が立ち並び、西側を沙流川が流れる。二風谷の語源はニプタイ（大

森林の意）。かつては、鬱蒼としたカツラの密林が広がっていたという。約五百人の住民のうち八割がアイヌ民族の血を引く二風谷には、「ここは世界一のアイヌの里なんだよ」と胸を張って生きる人たちがいる。

集落の中心部をすぎると、右手に巨大なケーブルクレーンが目に飛び込んでくる。北海道開発局による二風谷ダムの工事現場である。町内に二風谷・平取の両ダムを建設することが明らかになったのは一九七一年。それから二〇年あまり、自然や「民族の里」の破壊を憂慮する人びとの声をよそに建設が進み、七割ほどの進捗率だ。

小学校のそばから橋を渡り、水没予定地に向かった。土地収用について知らせる六年前の看板が、橋の近くにポツンと立つ。築堤を行くと荒れた水田跡が拡がり、河川敷では砂利採取跡がめだつ。対岸では、周囲の風景と

### 「苦東」が呼び込んだ沙流川開発

「沙流川総合開発計画」の一環として、二風谷ダムの建設計画が平取町に知らされたのは七一年。苦小牧東部（以下、苦東と略）工業地帯の基本計画が策定され、巨大開発のバラ色の夢が振りまかれていた。

苦東開発の用水需要を満たすために沙流川水系からの取水が計画されていく。当初計画によると、沙流川支流の額平川上流の豊穰地区に平取ダムを築造する一方、下流には二風谷ダムを建設して、そこから導水トンネルを経由して苦東に水を供給する——とされ、八五年段階で日量一五〇万㎡の取水を見込んでいた。

そのころ、町が把握していた沙流川の流量は日量二五〇万㎡であった（太田原高昭、守友裕一「苦小牧東部開発と沙流川水資源問題」より。大明堂発行「地域開発政策の課題」所収。ダムの堤高は三二・五メートル、堤頂の長さ五八〇メートル、総貯水量は三二五〇万トン。目的は、洪水調整や農業・工業用水、水道用水などと説明されたが、主目的は苦東の水源確保にあったことは、「日量一五〇万㎡の取水」という数字に表れている。

オイルショックの到来とともに苦東開発は破綻した。が、ダム計画は「主目的は洪水調



たきかわ・こうじ  
一九五四年北海道生まれ。和光大学人文学部中退。地方紙記者、酪農業などを経て、現在、フリーライター。著書『幌延——核のゴミ捨て場を拒否する』（技術と人間）。

不釣り合いなカラー護岸の工事が進んでいる。

護岸工事は、支流のピパウシ川周辺で行なわれていた。ピパウシ（貝がたくさんある所の意）の地名は、かつての豊かな自然をほうふつとさせる。一八五八（安政五）年、丸木舟で沙流川をさかのぼった松浦武四郎は、ここで一五軒のコタン（集落）を確認している。明治時代の役人は、ここに住むアイヌの人たちすべてに「貝沢」と名付けた。だから、二風谷には貝沢姓の人が多い。

護岸に向かう遊歩道がつくられることになり、遺跡発掘が進んでいた。担当者に聞くと、アイヌの住居跡、その下に縄文時代の遺跡が確認されたとか。四百年ほど前の住居跡のそばには墓が見つかり、人骨が一体あった。鎌や漆器の副葬品が見えるので女性のようだ。

四百年前といえば、和人の庄政に抗してアイヌ民族が蜂起したシャクシャインの戦い（二六六九年）から、そう遠くない。近くの町では毎年九月、アイヌの人たちの手でシャクシャインの供養祭も催されている。人骨は、簡単な供養のあと、研究材料になるとか。「すぐ近くの民族博物館にも埋蔵文化財の展示スペースがなくて、せっかく掘り出しても活用できないんですよ」と、担当者は残念そうだ。遺物や人骨は研究機関などの収蔵庫に保管される運命らしい。工事で眠りを覚まされた人骨は数体あるが、これで先人の魂が浮かべられるのだろうか。

整」の名のもとに進められた。八二年には水没地区の地権者に補償基準が示され、着工にむけて地ならしが行なわれた。借金に苦しむ地権者に補償金で揺さぶりがかけられ、八四年九月には町議会が全会一致でダム建設の着工同意を議決した。

「水に対する利権も絡んでいたの、母なる川の貴重な資源を苦東に持つていかなくても」という意見が議会内にあり、結構もめました。最終的には、将来の広域行政のなかで苦小牧の発展の波及効果があるし、着工に同意したんです」

議員歴一八年、昨年から町議会沙流川水資源対策特別委員長を務める村上武夫さんが、当時を振り返る。

町によれば、二風谷ダム建設による水没面積は五七〇ヘクタール(うち田畑は約二二〇ヘクタール)。水没予定地に住んでいた人が二戸あるが、ほとんどの人が通い作で耕作していた、という。

耕作地の多くは、アイヌ民族に土地を与えて農業を奨励することを通じて同化を強制しようとした、「北海道旧土人保護法」(一八九九年制定)による給与地。「下付」された給与地は、北海道に和人が急速な勢いで入植したあとに残された、農耕不適の荒地や傾斜地などが多いが、水没予定地も例外ではなかった。

「川向い地区では、水稲以前にも畑作が行われていたが、仮橋や農道橋は水害によって度々流失、渡舟による

通い耕作で、堤防のない時代は水害の常襲により、あまり収穫がなく借財が増す一方であった(八三年に二風谷自治会が発行した部落史「二風谷」より)

というように苦闘がつづいていた。水害の悩みから解放されるのは、六六年に築堤が完成してからである。堤内の造田も進んで、穀倉地帯に生まれ変わった。

その矢先にダム計画が浮上し、減反政策が追い討ちをかけた。着工にむけた一連の手続きが進んでいた背景には、給与地問題と減反によって揺れ動くアイヌ農民の姿、苦東の巨大開発が互いに影響しあっていた。

#### 給与地の強制収用とサケへの思い

二月初め、アイヌ民族の復権リーダーだった貝沢正さん(北海道ウタリ協会副理事長)が七九歳で他界した。水没地の地権者の一人だった貝沢さんは、「ダムを造るよりも木を植えよ。山の木は二百年間切つてはいけない」という遺言を残して、神の国に旅立った。

「じいさんのやり始めたのは、『アイヌを人間として認めろ』ということでした。『世界で一番アイヌの多い二風谷にダムを造るのは、聖地の破壊だ』このまじや日本国民は自然破壊のために滅びていくぞ」と。これ(土地収用)を機会に国に抗議しようという目的でやっていったと思うんですよ」

こう語る長男・耕一さん(四五)の名刺には「百姓」

と刷り込んである。「シケレツ(キハダの実)農場」の主で、水田と畑が一八ヘクタール近くある。二風谷の中心部に直売所を設けて三年目、「アイヌモシリ(人間の住む静かな大地)で低農薬・有機栽培にとりくむ」をキャッチフレーズに産直も手がける中堅農家である。ダム建設は、国のエゴでアイヌの聖地を破壊しようとするように見えて、快く思っていないかった、という。

町議会の着工同意につづいて、八六年暮れには土地収用法による事業認定がなされた。が、萱野茂さん(前二風谷アイヌ文化資料館長・著述業)や貝沢正さんら一部の地権者は、土地収用に異議を唱えて折り合わないまま道開発局は八七年一月、未買収地(約二・七ヘクタール)の明け渡し申請を道収用委員会に提出し、民族の権利回復をめぐる論争の場となっていた。

地権者側は、明治以降の同化政策のなかでアイヌの文化や言葉、土地が奪われていった歴史を訴えながら、沙流川でのサケ捕獲権の回復や正当な土地価格の補償などの要求を示した。いわば、土地問題を扱った一種の条件闘争である。

萱野さんの弟で、建築業のかたわら民宿「二風谷荘」を営む貝沢輝一さん(五五)は、中学生のときにヒエのほろが多い弁当箱を友だちの前で開けて食べられなかった思い出がある。だから、築堤ができて水害の心配もなく稲作が可能になったことを心から喜んだという。

三年前、住民の署名を添えて、サケの捕獲権回復を求める請願書を収用委に出したことがある。水没地域住民の職場確保や、沙流川をサケの漁法や料理などのアイヌ文化伝承の場にするよう要望したのである。

「最初は『二風谷なんかにはダムはできっこない』と思っていたの。真剣に信じなかったよ。いまだに、あんなコンクリートの建物が一日一日キノコみたいに大きくなっていくのを見たら、腹立つよ。魚道ができたから(ダム建設事業所の)所長に『魚が上がるの?』と聞いたら、『分からない。魚に聞いてください』だってさ」と憤る輝一さんにとつての願いは、「ダムができるのはもう仕方ないとしても、アキアジ(北海道弁でサケのこと)が上がつてきてくれる方法を取ってほしい」ことだという。

道収用委は八九年二月、申請どおりの強制収用を認める裁決を行なったが、萱野、貝沢さんの二人はこれに納得しなかった。翌月、補償金の受け取りを拒否した二人は「アイヌ所有地の強制収用は、憲法二九条の『正当な財産権の補償』に違反する」と、建設大臣に審査請求を申請。昨年来、請求人や参考人の意見陳述や担当者の現地視察などが行なわれ、係争中である。

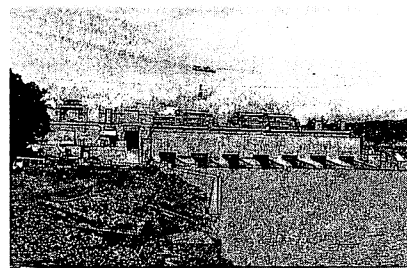
審査請求の参考人になった北大教授(人類学)の吉崎昌一さん(六〇)は、北太平洋沿岸の少数民族の遺跡に明るく、サケを呼び戻す市民運動にもかかわってきた行動派の研究者。「神の贈り物」としてサケが重用視され、



堆砂と流木で埋まった岩知志ダム。



関連工事に伴う遺跡発掘。遺物の扱いは…。



96年の完成を目指す二風谷ダムの現場。

アイヌ民族の日常の食生活で多彩な利用がされていたことを論証した意見書のなかで、次のように指摘した。

「和人の進出や開拓使の政策のなかに、アイヌ民族の生活や伝統的な宗教を無理解から蔑視し、破壊に追い込んだものがきわめて多かった。和人側の無知がもたらした悲劇の発端がここにある」

「チャシロ砦、見張り台、祭事など多目的に使われた段丘上のアイヌ遺跡の扱いについて」吉野ケ里遺跡が、邪馬台国との関連で大がかりな開発計画を変更して保存される一方で、チャシロが何の議論もいまま破壊されるイージーな行為が、話題にならなかつたのは奇妙でさえある。伊勢神宮脇の五十鈴川に、信仰に関する特別な構造物も見いだせないとの理由でダムやプールを無造作に建設したら、どのような反響があらわれるだろうか。沙流川で、いくつかの遺跡を破壊して工事を進めることは、これと全く軌を一にする行動といつてよい」

わたしの目には、「和人側の無知がもたらした悲劇がダム建設によって繰り返されようとしているように映る。開発局側は、「ダム博物館をつくって、チャシロ跡をコンパクトにした形で復元したい」(伊藤忠行沙流川ダム建設事業所長)とか。それが破壊への償いだとしたら、何ともやりきれなくなる悲しい現実である。

萱野さんは、自宅を訪れたわたしに、「ダム計画には、一番最初から反対してきた。議会は針

すよ」と、不退転の決意を強調した。

わたしは、一連の経過のなかで引つかかっている点について聞いた。それは、ダムサイトに近い耕一さん名義の土地が五年ほど前から建設業者に賃貸され、そこがダム工事の前線基地になっているからである。

「長期戦になって、いろんな人から経済的援助を受けないでやるにはどうするか——と考えて出た結論がこれ(土地の賃貸)でした。当時、借金はがっちり持っていた。批判は覚悟のうえでやったことで、(裁判などの)結果が出たときに分かってもらえるんじゃないかな」

と、きっぱりとした口調で答えが返ってきた。確かに、それも一つの生き方だとは思ふ。当事者ではないわたしには、どうこう言う資格はないのかもしれない。そのような選択を強い開発行政のあり方を問うことも大切だろう。が、やはりすっきりしないのである。

### 「沙流川を守る会」の活動と願い

ダム建設に反対してきた「沙流川を守る会」代表の山道康子さん(四五)の家は、萱野茂アイヌ記念館(旧二風谷アイヌ文化資料館)のすぐ裏手にある。自宅の脇では、山道さんを慕って各地からやってくる若者たちがチセ(アイヌの住居)などを復元して暮らしている。事情を知らぬ人が見たら、ちょっと驚く光景でもある。

ダム計画を知ったのは、二〇年ほど前にさかのぼる。

のムシロ」だったけど、それでも(土地収用に)判子をつかないのは並大抵ではなかった」

と強調したが、ダム問題をめぐる詳しい経過はあまり語ろうとはしなかった。

七五年から町議を務め(今年七月、社会党から参院選出馬のため辞職)、水資源特別委のメンバーだった萱野さんは議会の着工同意のときにも反対していない。強い姿勢を示すのは、収用問題が進展してからのようだ。

「あの人は当初、『皆さんが言うなら(ダム建設に)同意しなければならぬ』と柔軟でした。それが、アイヌ文化伝承の第一人者として外国の少数民族と交流したり、収用問題で学者などとの接触の機会も増えた。アイヌ新法との絡みも出てきた——そうしているうちに自分の理念が変わってきたんでしょうね」

と、同僚だった村上武夫町議が分析した。特別委では、萱野さんが主張するサケの捕獲権拡大について、隣の門別町の漁業関係者らと折衝をつづけているとか。

法的な争いになった土地収用とアイヌ民族の復権問題は、審理が長引きそうである。父親の遺志を引き継いだ貝沢耕一さんは、「審査請求の裁決だけで引き下がるつもりは毛頭ない。一〇年も二〇年もかかるという覚悟のうえですよ。最高裁まで行っても満足できないですよ。いまの日本の情勢では、国際的な場にまで持ち込むかね。国もその覚悟で対処してもらわなければならない

小学校の統合や観光開発の見取り図を前に、地区の有業者がダム計画との絡みを住民に説明したことがある。すでに民族の復権活動にはかかわっていた。説明を不審に思ったが、夫を交通事故と闘病生活の末に失ったころでもあり、とてもダムのことまでは手が回らなかった。

「全国的にダムで離村、廃村になっていって部落が壊れているのに、どうして二風谷にこんな問題が起こってくるんだらう——」と、思っていました。最初は、隣の鷓川にダムを造る計画があったそうですが、漁協は「シヤマの水揚げに影響が出る」と断った。沙流川にきたのは、『向こうはアイヌが多くて無知だから、うまい話を持っていくと乗るんじゃないか』って(開発局が)考えたんじゃないかしらね」

そうした思いを抱いて隣の漁協に調査に行ったり、町史で洪水の歴史を勉強したりして、動き出したのは七六年ころから。さまざまな逡巡のあと、「守る会」を発足させるのは八二年秋、開発局が環境アセスメントを発表して間もないときである。当時の活動記録をまとめた印刷物を見せてもらった。「アセスメントに意見書提出」「生越忠和光大教授(地質学)を招き、二風谷・平取両ダムを視察」「開発局にボーリングの生データ公開を要求」——などと、発足して一年ほどの間に目まぐるしく動き回っていたことが伝わってくる。

環境破壊への危惧とともに、山道さんらがずっとこた

わってきたのは水没する給与地の問題である。

「本人が生きているのに、不存在の形で開発局が勝手に建設省のものとして土地の売買契約を結んでいた。アイヌの土地だと明記されているのに、土地の地番変更などをやって全く違う人の土地にされてしまった、という話もありました。わたしが必死になって調べているのを開発局が知って、慌てて土地転がしをやったんです」

あの手この手で利益誘導をはかり、借金を清算できると持ちかけては土地を奪うようなことが平然と行なわれていたらしい。「借金ダルマになるから、早くダムを造って補償金をくれ」という人もおり、土地を守ることを訴えてきた山道さんは板挟みになって悩んだ。

用地買収が進んで、八八年にはダムの基礎式が行なわれるという既成事実の積み重ねのなかで、「守る会」の活動も沈静化していったように映る。最近、山道さんは悔しさと自省の念が入りまじったこんな文章を書いた。

「一木一草に至るまで、生命として大切に育んできた民族は、理屈抜きに、ダム建設に反対すべきでした。権利の売買は、ダムに関しての無知が生んだ大きな魂の売り買いであつたと反省しています」(『月刊社会党』九二年七月号より)

そんな反省を胸に、次の運動を模索する。「守る会」では署名運動に取り組んでおり、外国の環境保護団体から建設省に「ダム反対」を訴えてもらおうとしている。民

族の主張を前面に出して法廷で争う道も検討中だ。

「いままでの経過のなかで、アイヌ民族にとって生活・文化・歴史的伝承に対する調査はありませんでした。少なくとも、その事前調査の間はダム工事は中断しなければなりません。もしこの訴訟が始まったら、菅野さんたちの訴訟は勝つんじゃないですか」

「ダムやゴルフ場、リゾートは、けっしてアイヌの聖地に、いや人間の住んでいる大地に持つてきてはいけない。アイヌはカムイ(神)とともに生きてきたけど、日本人はカネとともに生きてきた。もう、神とともに生きる生活のほうに回帰していくときじゃないですか」

と、山道さんは力を込めた。土地収用の問題で争っている菅野さんたちとは、民族の復権を求める気持ちは一緒でも、運動の視点が違うようである。両者の間に感情的な確執もあるらしい。ダム建設に異議を唱える人びとは少数派である。互いの違いを認め合いながら進む運動の道はないのだろうか——そんなふうに感じた。

#### ダム建設と周辺整備をめぐって

今年の正月、二風谷自治会は「ダム完成までに周辺の環境整備を図るべきだ」とする総会決議を行ない、町などに要求書を出した。

自治会長の貝沢薫さん(五五)は、二風谷の入口で民芸品店と「民宿チセ」を営む。薫さんは、部落史のなか

で「祖父の彫刻は高く評価されており、雄弁家でもあつた」と書いている。店の前には、アイヌに知恵を授けた神様が自分の身代わりにおいていったとされるノヤイモシカムイ(ヨモギの神)の像が、ひととき目を引く。

「ダムの進行率が七〇%にもかかわらず、国道の歩道一本つくられていない。工事のために埋蔵文化財を掘つても、満足な収蔵場所もない。ちゃんとした博物館で展示してほしい。住民は、ダムの代償として地域振興を望んでいるんですよ。それを何らかの形で反映させなくてはと思って、決議したんです」

と、開発局や町に対する不満を訴えていた。最初のころ、基本的にはダム計画に反対だった。が、いまは関係機関に周辺整備を働きかけるべきだという。「ダムは」なければいけない。でも、ここまできたら代替策を要求してもいいと思うんだよ」と、心境を話してくれた。決議はしても、心からダム建設に賛意を示しているわけではないのである。

ダムに期待をかけるのは、住民よりも町のようだ。町は、ダムの受益者から金を集めて一五億円の基金を積み立てた。それを活用して噴水、駐車場などをつくる

「二風谷レークサイドパーク構想」がある。「将来的には湖畔と平取温泉を結ぶ道路もつくって、観光資源として売り出したい」(商工観光課)と期待をかける一方で、「着工同意をした以上、一日も早く周辺を整備したいけれど、

土地収用の問題がネックになっているのは事実」(企画課)というジレンマを抱えている。

一五年ほど前、平取町ではダム計画との絡みで二風谷を「民族の里」にする構想を練ったことがある。町の委託で吉崎、菅野さんが委員となり、スウェーデンの民族村を視察したりした。調査機関の手でレポートも出されたが、結局は目の目を見なかった。そのことを知る住民は少ない。のちに、構想は観光を重視した「レークサイドパーク」や、町が文部省などに開設を要望している「民族の里」のような形に矮小化されてしまった。

「二風谷全体を『里』にして、エカシ(長老)やフチ(嬪)を招いて儀式をやったり、伝承活動を行なう民族大学のような構想でした。観光面に引きずられずに、そこでアイヌの人たちがきちんと生活できるものをやろう。国がダム工事を強行するなら、これを逆手に取ってこういう——というもので、予算面でもできない相談ではなかった。それが、なぜ生かされなかったのか……」

吉崎さんは、こう言っただけで悔やむ。

そこには、北海道に君臨してきた開発庁に正面きってモノを言えなかった地方自治の弱さと、金の力に翻弄されてしまった民族の悲しさ、それを支えてきた国民の側の無関心さがあるのではないか——それが、わたしの印象である。来年は国連の「先住民のための国際年」が、わたしたちの足下にはなほだ心もとない。